

森林体験・森林環境教育

北海道下川町

NPO法人「森の生活」は
どんな事業を行う団体ですか？

北海道北部にある下川町は、面積の9割を占めるのが森林で、林業が盛んです。豊かな自然環境に恵まれた町ですが、過疎化が進んでいます。その下川町を活性化させようと、私たち「NPO法人森の生活」は活動しています。97年にボランティアグループとして始まり、05年にNPO法人になりました。

活動の核になっていることは、森林資源の有効活用です。町役場や下川町森林組合などの方と連携し、さまざまな事業に取り組んでいます。私の担当は、森林体験事業と森林環境教育で、森林体験プログラム企画・実施に携わっています。

森林体験事業と
森林環境教育の内容は？

森林体験事業は一般の人が対象です。森林を歩いて心身の癒しに役立てようという森林セルフケアや、間伐したトドマツの枝葉を原料にした精油作りなどのプログラムがあります。参加者の半数が道外の方で、東京や大阪からも来ます。

一方、森林環境教育は、下川町の子どものためにやるものです。町役場と教育委員会の協力を得て、幼児から高校3年生まで一貫した森林体験プログラムを実施するという、全国でも珍しい取り組みで

す。06年から続いている事業で、その成果を実感することも少なくありません。小学生、中学生に森林や林業のことを尋ねると、ほかの地域の子どもでは考えられないほど、活発に意見が出てくるんです。高校生も興味をもつて学んでくれます。町内の下川商業高校には学校が所有する学校林があって、その経済的価値を測定してみようというプログラムもやりました。GPSやレーザー距離計など測量機器を使って樹木の体積などを測定し、市場での価格を考え、そこから森を育てる費用などのコストを差し引いて利益を算出してみようという内容です。

こうした一貫教育で町の子どもたちは森林や林業のすばらしさを感じ、将来の町の担い手に成長していくのです。

「森の生活」で働くように
なった経緯を教えてください

北海道大学農学部森林科学科で学んでいたとき、道内の大自然に抱かれた農山村を旅する機会に恵まれ、かけがえのない価値があると感じました。農山村には森林があり、森林には林業という経済的な価値のほか、土砂災害の防止の役割や、時には信仰の対象にもなるという価値がある。また、いろいろな生き物が暮らす場です。森林は宝の山なのです。しかし、こうした森林のある農山村は後継者不足や離農な

下川の価値を
たくさんの人たちと
分かち合いたいです

どの問題に直面しています。このままではいけない、農山村の振興にかかわりたいと思うようになりました。

大学卒業後、京都の種苗会社に就職しましたが、営業職で農家さんと接するたびに農山村の厳しい現状を感じてしまい、自分がやるべき道に進みもうと決意しました。2年勤めて退職し、北海道へ。「森の生活」の代表が北大の先輩という縁もあり、10年4月に職員になりました。現在、職員は8人で、うち6人がぼくのように他府県からの移住者です。

今後の目標を
教えてください

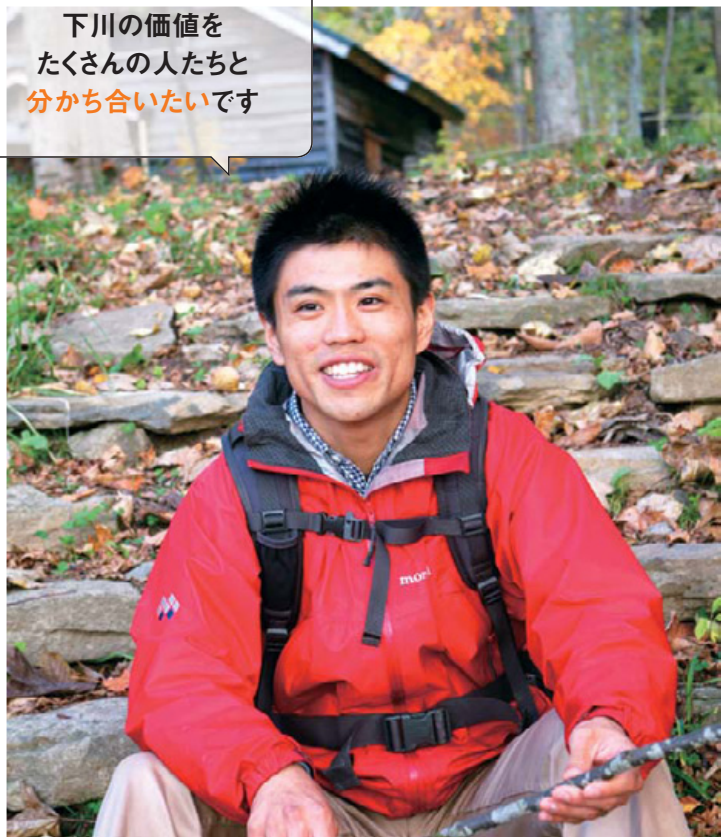
やってみたいことはたくさんあります。当面の目標は、幼児から高校生までの一貫した森林環境教育の質をより高めていきながら、こうした森林環境教育を地域外

森林、林業の価値や すばらしさを伝える事業で 町の活性化に貢献

NPO法人森の生活 森林環境教育・体験事業担当
麻生 翼氏

あそう・つばさ●1984年生まれ。愛知県立旭丘高校、北海道大学農学部森林科学科卒。京都の種苗会社で営業職、北海道の道東でキャンプ場管理運営を経験し、10年4月よりNPO法人森の生活の有給職員。

にも普及させることです。そのためのデータ作りを大学の研究者と一緒に進めているところ。また、森林体験を通じて、下川とほかの地域の人たちが継続的なつながりを築けるよう、新しい仕組み作りの構想も膨らんでいます。



被災した中高生の 自主学習サポートと心のケアを 行う場所を開設

子どもサポート

宮城県石巻市

どのような経緯で
現在の活動を始めたのですか？

今年2月末、勤めていた住宅メーカーを退職。転職活動を始めた矢先、震災が起きました。面接も延期になり、なす術もなく家に引きこもっていたら、知り合いから「ボランティアにこないか」と。時間もあつたので誘われるまま3月末から宮城県へ入りました。

初日に被害のひどかったところをまわったのですが、何をどうとらえていいのかまったくわかりませんでした。想像の範囲を超えた現実がそこに広がっていました。

避難所をまわるうちに、被災して学校に行けない子どもたちを目の当たりにし、何かしらの支援が必要だと感じるようになりまし。家を流されたり、親や友だちを失ったり、親の仕事がなくなった

子どもたちから
パワーを
もらっています

ほっとスペース
東郷恵美氏

とうごう・ちえみ ●1986年生まれ。茨城県立竹園高校、中央大学総合政策学部卒。在学中はNPOカタリバの学生職員として活躍。住宅メーカーに2年勤務し、今年6月より宮城県石巻市にて「ほっとスペース」開設。

りしているのに、グッと堪えている子どもも多かった。少しでも心のうちを吐き出せるようにしてあげたかった。居場所を作つてあげたいと思いました。

それで最初は登米市にあるお寺で、寺小屋みたいな感じで、自主学習のサポートを始めました。その後、子どもたち専用のスペースが欲しいねということでもわりの応援もあつて、6月から石巻市に拠点を移し、本格的に中高生の居場所として「ほっとスペース」を開始しました。

具体的にどんな活動をしているのか
教えてください

子どもたちの自主学習のサポートをしたり、遊んだり話し相手になつたりしています。みんな自分でスケジュールを立て、それに従って自主的に行動します。現在、通ってくる子どもは約35人。少ない時で2、3人、多くて10人ほど。スタッフは私以外にもう1人、あとは大学生ボランティアが約10人。交代制です。

この活動を始めて
良かったなと思うのは？

ある中学生の女の子が、自宅近くの仮設住宅に行き、「何か私にできることはありますか」と尋ねてまわったんです。その話を知ったほかの子たちが「ほっとスペースのみんなでやろうよ」と言い出し、その女の子がリーダーとなって、仮設住宅の集会所で1日だけの「ほっとカフェ」を開きました。当日は大盛況。子どもたち自身にとっても非常に有意義な1日でした。しかも「次は自分がリーダーをやりたい」という

子が2人も出てきたので、今後も月1回、開くことになりました。

震災の色が薄まってきたものの、子どもたちも被災者。しかも、実は震災前から不登校、発達障がい、いじめの問題など、さまざまなつらい現実、悩みや苦しみを抱えていたことが最近になってわかりました。そういう子どもたちが人のために何かしたいと思ひ、次々行動していく。そのパワーに圧倒されました。私のほうが勇気づけられることが多くなっています。子どもって本当にすごいなと思います。

子どもたちと接するうえで
心がけていることは？

そばにいて寄り添ってあげることしかできないけれど、継続してそうしてあげることが大事なんだと思います。そばにいれば自然に心を開いてくれます。ただ、専門性のない自分が無力だと感じることもしばしば。そこをどうしていくかは大きな課題です。

今まではボランティア団体「つなプロ」の一プロジェクトだったのですが、10月末で「つなプロ」の支援が終了。今はいくつかの自治体や団体の助成金を受けて運営しています。近い将来、法人格を取り、居場所を求めている子どもたちをサポートするしくみをここで確立したい。そして地元の人にそれを引き継いでもらえるようになつたら、自分の「次」を考えたい。教育に関する専門性を身につけ、いずれにしても子どもの役に立つ仕事にかかわっていけたらと漠然と思っています。

1200坪の土地に 農園や農家レストランを 建設し、被災地の雇用創出

農業6次産業化

宮城県仙台市



株式会社ファミリア 代表取締役
島田昌幸氏

しまだ・まさゆき●1983年生まれ。北海道・私立室蘭大谷高校、北海道教育大学岩見沢校卒。北海道で起業したあと、各地で地域振興事業にかかわる。09年に仙台へ移住し、10年に現在の会社を設立。

今の仕事に就いた経緯を
教えてください

うちの家系が開拓者気質で、祖父も父も自ら会社を興していたので、私も就職という考えはなく、卒業後すぐに会社を興し、北海道岩見沢で英会話スクールを立ち上げました。ただ、学生時代から町おこしイベントにかかわらせていただいたご縁

から、岩見沢市のイベント業務の委託を受けるようになったので、新たに別の会社を設立し、地元商店街の活性化や若い人たちが活動しやすい環境を推進する事業にも取り組むようになりました。

すると、そこでの活動が評価され、国土交通省の観光地域プロデューサーというものに認定されました。各地域に向向いて

具体的にどんな事業を
展開しているのですか？

農業・漁業・林業といった1次産業の6次産業化にかかわるコンサルティングを手がけています。6次産業化とは1次産業と2次産業、3次産業をつないで新たな事業にしたり、生産物に付加価値をつけて新しい商品を開発したり、あるいは1次産業を中心に据えたまちづくり、観光地域づくりを行うこと。それによって私たちの「食」を支えてくれている1次産業従事者の所得アップと担い手を確保し、安定的に経営できる環境を作ってお手伝いをしてるのがファミリアの事業です。

現在、島田さんが
主に携わっているのは？

東日本大震災後、地元有志企業と共に「東北ROKU(6)プロジェクト」を立ち上げました。目的は被災者や障がい者などの雇用の場を作ること。宮城県名取市の1200坪の土地に、草・木・花を含むベジタブルガーデンや水耕栽培の農園、農家レストラン、農産物の加工場、パン工場、そば

レストラン、キッチンスタジオなどの施設を建てる予定です。環境や防災面にも配慮した造りにし、被災地復興のモデル事業にしたいと考えています。来年4月のオープン時には約50人の雇用創出を目指しています。同時に、地元の人たちが楽しく集まり、気持ちよく過ごせるコミュニティの場になつていったらいいなと思っています。そして、将来的には東北6県をはじめ、全国に幅広く展開していきたいと考えています。

この事業を始めるきっかけは被災者との会話でした。3月11日の翌日から福島県や宮城県をまわり、炊き出しや物資支援を行っていたのですが、ある被災者が「働いていないと気が狂いそう」と言ったんです。その時「働くって何だろう」「幸せって何？」つてもものすごく考えました。そして、思ったんです。義援金20万円の支給も必要だけれど、それ以上に自分で働いて20万円稼げる環境を作るほうが大事なんじゃないかと。それで、自分の会社で今推進している6次産業化をもっと大きなプロジェクトにして、雇用創出につなげることが求められていると考え、「6プロ」を始めたのです。1次産業が壊滅状態にある東北で、農業を中心にした街づくりのモデルになればいいなと思っています。幸いにも、本気で日本の未来をどうするか、震災をどう伝えていくかを考えている人々が賛同し、協力してくれて着々と進んでいます。よくにとつては、利害関係を越えたところで、一緒に新しいことに挑戦してくれる人たちに出会えたのが、何よりの収穫です。

街ブランド向上

千葉県松戸市

千葉県松戸市でどんな
仕事をしているのですか？

松戸は東京のベッドタウンとして発展してきましたが、駅から離れた場所に大型スーパーができて人の流れが変わり、駅周辺は空き店舗が目立つようになりました。そんな現状をなんとかしたいと、10年5月からJR松戸駅の西口駅前エリアの活性化事業に取り組んでいます。

主には、地元の空き家や空き店舗のオーナーと、東京都心のアーティストやクリエイターをつなぐ事業です。名付けて「脱東京不動産」。長年使われずに放置されていた物件を、「修繕しないでもいいから、ほくらに安く貸してください」とオーナーにお願いし、借り受ける。そして、オーナーの了解のもとで、「壁に絵を描いたり、改造したりしてもOK」ということで、アーティストやクリエイターに提供します。転貸という形態です。オーナーはあらかじめ物件なのに家賃収入が入るし、借りる側も都心の物件に比べて家賃が格安なうえ、自由に使えるという利点があります。これまで約20人に物件を提供しました。現代アート作家、家具職人、建築家、デザイナーなどです。

具体的にはどういう街づくりを
目指しているのですか？

基本はおもしろい人を集めること。才

能や可能性のある人が集まれば、魅力的な街ができます。そのためにほくらの物件を利用する人たち：便宜的に「入居者」と呼んでいます。その入居者が地域の

の一員になることが重要。毎月、地元の人との交流会を設けています。地元の人と入居者が一緒に何かを始めるといふ動きも出てきています。こうした地域コミュニティ作りもほくらが目指すものです。

ほくら自身も地元の人や入居者を巻き込んで、イベントを手がけています。そのひとつが松戸市役所からの委託事業の「松戸アートラインプロジェクト」。松戸駅西口地区で秋に開催されるイベントで、11年は企画・運営のすべてにかかりました。

松戸で街づくりの事業を
始める以前は？

24歳でNPO法人を作り、東京の渋谷を拠点に、若いアーティストなどのために活動の場や機会を提供する事業を手がけていました。学生時代、周りには絵画や音楽などアーティスト活動をしていた人が大勢いましたが、辞めてしまった。でも、絵や音楽はその人が生きるうえでかけがえのないものだとはくらは思っていた。彼らのような人たちが続けていけるようにサポートする仕組みを作り、そうすることで世の中を変えたいと考えていました。

実績を残すことはできました。が、文化

として根づくにはいならず、もつと強度のあることをやりたくになりました。頭に浮かんできたのが、いろいろな人が生活している街を変えていく事業です。そうして選んだ街が松戸。知人の紹介で商店街の人たちと話す機会に恵まれ、地元の人たちのやる気を感じました。

世の中を変えたいと
思うようになったきっかけは？

ほくらは小学生のときに先天性の網膜はく離が見つかったり、中学生生活の終わりに治りにくいアトピーが発症したりして、絶望的な気持ちでいました。「同級生は元気なのに、なぜ自分だけが」と。そんな毎日でしたが、高校2年の夏に治療で入院したのを機に、自分の将来を考えるようになりました。翌年に阪神大震災がおき、ほくらが通学していた神戸は大きな被害を受

不動産ビジネスを通じて
松戸の活性化に
取り組んでいきたいです



松戸駅西口周辺に クリエイターを集め 魅力的な街に変える

株式会社まちづくりクリエイティブ 代表取締役社長
寺井元一氏

てらい・もとかず●1977年生まれ。兵庫・私立灘高校、早稲田大学政治経済学部政治学科卒。02年、NPO法人KOMPOSITIONを設立し、東京・渋谷を拠点に活動。10年5月に株式会社まちづくりクリエイティブを設立。

けました。人生はいつ何があるかわからない。ならば、好きなことを思い切りやればいいと思いました。興味のあることは何かと考えたとき、「自分がいいと思える世の中に変えていくこと」でした。高校時代のこの想いが、ほくらの原点だと思います。

200以上の活動を通して 地元を元気にする 不動産管理会社

多彩な地域貢献活動

千葉県大網白里町



大里綜合管理株式会社 賃貸部
中村彰宏氏

なかむら・あきひろ●1978年生まれ。千葉県立千葉商業高校情報処理科卒。プログラマーとして就職するが1年で退職し、環境系NPO、環境アセスメント会社、環境系教育施設などを経て、2009年に大里綜合管理に転職。

お金のために
働いている感覚は
ないですね

大里綜合管理の地域貢献活動
について教えてください

当社はもともと庭などの草刈りを行っていた会社で、今は不動産管理業や家のリフォームなどを中心に事業を行っています。お客さまは皆さん地元の方ですし、この千葉県外房エリアで生きてきた地元密着企業なんです。

地元の不動産を扱っているわけですから、当社としても地域の価値を高めていく努力をしたい。そこで、社長の野老真理子が考えたのが、「地域貢献活動を通して魅力的なまちづくり」でした。ごみ拾いや地元の人たちを対象にしたイベントの開催といったことなら当社のような小さな会社でもできることからね。

現在は駅前や道路、海岸などの清掃、駅前の花植え、ウォーキングイベント、エコバスツアー、寄席・カルチャー教室などの文化事業、オフィスを利用した学童保育や音楽イベントなど、合計で200以上の活動を行っています。本格的に取り組み始めて10年以上になりますが、社長が地元の方と交流する中でどんどん新しいアイデアを出していくのです。こいベースで増えています(苦笑)。

社員教育としての意味もあり、地域の方と直接触れ合える機会にもなるので、私たち社員にとってもプラスになる要素が大きい活動だと感じています。

ご自身のキャリアについて
教えてください

高校を卒業して最初に就いた仕事はプログラマーでした。そのころ、「自分が死んだあとも何かを残せるような仕事をした」と考え、植林事業などを行う環境系NPOのボランティアに参加。その後は会社を辞めて、そのNPOが運営する山村留学施設で働き、さらに環境アセスメント会社、オーガニックスヨップ、環境系の教育施設である千葉市少年自然の家などで働いてきました。自然保護にかかわっていきたいという思いが貫いてあったのですが、さまざまな職場で経験を積む中で、子どもに自然について教えることもまちづくりも自然保護につながるのだと視野が広がっていききましたね。

当社に転職したのは2009年。当時大網白里町に住んでいて、当社が主催する炭焼き体験教室に参加したのがきっかけです。

けです。自分のやりたいことができそうな会社だと思って転職を決めました。

地域貢献活動と
本業との兼ね合いは？

私の場合は半々ですね。地域貢献活動は各社員5〜6件ほど担当しており、私は房総の山武市を12時間かけて歩く「山武50kmウォーク」、地元の方々が講師を務めるカルチャー教室「地球塾」、識者などを招く講演会「ねつと99フォーラム」の事務局を担当。そのほかパソコンスキルを生かしてほかのイベントの広報用ビラの作成などもやりやすく、ごみ拾いや学童保育の子どもの世話などほかの活動にもかかわっています。

イベントは休日やることも多いので休みがないといえるのですが、気にならないですね。地域の人のためになると思うとすごくやりがいを感じます。また、町を歩いていると、いろんな人に声をかけられるようになり、人とのつながりが広がっていることを日々実感しています。

本業(家賃管理)もノルマがあるので大変ですが、こつちをしつかりやらないと地域貢献活動が成り立ちませんから。

今後の目標を
教えてください

以前から、自然保護がボランティアではなく仕事になるような仕組みを作りたいと考えていて、いつかそれがこの会社で実現できれば理想ですね。同時に、この会社の地域貢献活動やその精神を私たち世代が受け継いでいかなければならないという気持ちも強くもついています。

多文化共生

神奈川県横浜市

多文化まちづくり工房の
活動内容を教えてください

横浜市泉区のいちよう団地は県営なので外国人でも入居しやすく、近隣地域に工場も多いため、住民の多国籍化が進んでいます。主にインドシナ難民、中国帰国者などの流れを中心として人が集まっています。ベトナム、カンボジア、中国、パキスタン、バングラデシュなど国籍出身は多様。私たちはこれらの人々が地域の中で生活していくためのサポートをしています。具体的には、日本語教室や子どもたちを対象とした学習教室、異文化理解を目的とした文化講座、地元のお祭りへの参加、外国籍の方々への入居サポートなどを行っています。教室の講師はボランティアスタッフです。日本人もいれば、教室で学んだ外国人の若者もいます。

地域の多国籍化によって
生じる課題とは？

まず言葉の問題ですね。地域での交流を深め、自分たちの居場所を作っていくためには日本語の習得が不可欠です。なかでも子どもたちは日本の学校で学ぶので、日本語が苦手なままだとハンデになってしまう。地元のいちよう小学校は今では外国籍・外国出身の家庭で育った児童が65%を占めており、子どもたちにとって学校にとっても大きな課題です。

もう一つは、地域の日本人が抱く抵抗感です。急速に町の様子が変わっていくわけですから致し方ない面もありますが、この地域も今、若い世代が減少しているという問題を抱えています。一方で、外国人の若い世代が増えているわけですから、この状況を町の活性化につなげていかないとこの町の未来もない。だから、私たちは単なるマイノリティ支援という枠にとどまらず、彼らの良さを生かすことができる新しいまちづくりを意識して交流イベントなども展開しています。

こうした活動を
始めたきっかけは？

高校生のころから社会への問題意識はありましたが、大学進学後も何をすればいいのかはわからなくて。そんなとき大学で中国帰国者を支援するボランティアサークルに勧誘されたのが始まりですね。行ってみたら楽しかった。日本人同士の付き合いはどこかドライですが、中国帰国者の方々は感情表現も豊かで人と人とのつながりを私自身が感じることができたんです。そこから活動にのめり込み、大学1年生のとき、ボランティアを通じて知り合った他大学の学生たちと日本語教室を開きました。いちよう団地に拠点を構えたのは大学3年生のときですね。本格的に活動してみると、支援を必要

としている人たちはたくさんいるのに支援組織は少ない。このまま卒業と同時に終わることはできないと考えて、就職はせず活動を持続することを決意しました。

活動を継続する中で
大変なところは？

人材の確保と運営費などの捻出ですね。日本語教室はお金を取ったから来られなくなる人もいるので無償。以前は週5日深夜のアルバイトをしながら活動していました。今は、県や国の共同事業・委託事業としてやっている部分はお金が出るのと、講演の謝礼金などがありますが、それでも週2回はアルバイトをしています。組織の基礎はできたと思うので、翻訳事業などでお金が回る仕組みを作ることが今後の課題。協力してくれる人々たちを食べさせられるようにはしていきたいです。

いちよう団地を
彼らのふるさとに
したいですね

外国人が地域で 共に暮らせる 環境作りを目指す

多文化まちづくり工房 代表
早川秀樹氏

はやかわ・ひでき●1974年生まれ。神奈川県立横浜立野高校、神奈川県大学外国語学部中国語学科卒。大学在学中から日本語教室を中心としたボランティア活動に取り組み、2000年に多文化まちづくり工房を設立。

どんなところに
やりがいを感じていますか？

今でも、使命感でやっているというより、彼らとつながることが楽しいというのが一番の原動力。楽しんでやりたいことをやっているから続いているんです。



アートプロジェクト

新潟県十日町市、津南町

大地の芸術祭
越後妻有アートトリエンナーレとは？

越後妻有は新潟県南端の地域で、十日町市と津南町の2つの自治体からなります。棚田と里山の緑が広がり「魚沼コシヒカリ」を産出する米どころです。ここで3年に1度開かれる現代アートの祭典が「大地の芸術祭」。作品は特定の美術館ではなく、空き家や廃校、田んぼ、雑木林、街なかなど、地域のあらゆる場所を会場に展示されます。海外からも多数のアーティストが出演します。

2000年の第1回展では約50日の会期中に約16万人が訪れ、09年の第4回展は来場者数約37万5000人に。迎える越後妻有は東京23区の面積よりも広いのに、人口は約7万5000人。豪雪地帯で過疎、高齢化の問題を抱えてきた町ですが、この芸術祭で元気が生まれています。

「芸術祭」という名前ですけれど、アートをテーマに越後妻有の魅力を掘り起こすという、町起こしなんです。当初は新潟県の地域振興支援事業でしたが、現在は地元自治体と私たちのNPO法人、協力企業などが連携して運営しています。会期終了後も一部の作品は展示されています。

「大地の芸術祭の里」では何を担当しているのですか？

主に松代地区の「まつだい棚田バンク」の

仕事です。この芸術祭は屋外展示作品も多く、棚田に代表される越後妻有の風景の魅力を引き出すような展示方法です。その棚田にかかわる事業は越後妻有の農村文化を守る活動であり、芸術祭を作る重要な活動でもあるのです。

松代地区の多くの棚田は、後継者不足で危機にあります。担い手のいなくなった棚田を維持する目的で始めたのがこの取り組みです。田んぼの里親を募り、運営資金や農作業のサポートをしていたら、収穫した米は里親になった面積などに応じて配当されます。ほくは里親との連絡業務のほか、耕作もしています。収穫の時はうれしいです。11年は、豪雪、震災、水害と天災が続いたので、米のできが心配でしたが、去年よりも良い米ができました。

慣れない仕事でどんな苦労がありましたか？

まつだい棚田バンクの棚田の維持には地元農家の協力が必要ですが、最初はその連携がうまくいかなかった悩みました。でも、ほく自身が田んぼで泥まみれになつて働くことで解決していききました。地元農家だけに頼るのではなく、ほくも一緒になつて頑張らなければ地域の人は本当の意味でのつながりは作れないと思い知った。今は農繁期は日中の大半が農作業。農家の方に指導してもらえてありがたいです。

越後妻有から
日本中の人に
元気を発信したいです

なぜ、越後妻有で働くようになったのですか？

東京の大学で油絵を学んで卒業後、衣料問屋に営業職で就職。でも、絵を描く時間が欲しくて、2年で辞めました。越後妻有に初めて来たのは08年8月。友人に誘われて「こへび隊」というボランティアで手伝いにきました。主に屋外展示のオブジェの手入れで、作品をより良く見せるために雑草を刈るという作業です。楽しくて、週末に越後妻有に通うように。最初は作品しか目に入らなかったのが、初めての稲刈り体験で変わりました。稲の匂い、棚田のあぜ道に咲く草花や、周りの棚田の風景が新鮮に感じられ「このすべてがアートだ」と開眼する思いでした。そして、このNPOの職員採用試験を受け、合格。収入は同年代のサラリーマンより低いですが、越後妻有でなら暮らせます。

「大地の芸術祭」で地域を盛り上げ、棚田の保全にも貢献

NPO法人越後妻有里山協働機構 職員
竹中 想氏

たけなか・そう●1980年生まれ。東京都立目黒高校、日本大学芸術学部美術学科卒。衣料問屋に営業職で2年勤めて退職。08年8月から「越後妻有 大地の芸術祭」のボランティアとしてかかわった後、09年7月から現職。

が、越後妻有でなら暮らせます。自然と向き合いながら生活し、アートを道しるべとなつてこの場所の魅力をひき出している。そんなすばらしさを多くの人に伝えたい。まずは来年夏に開かれる第5回芸術祭に向けて頑張ります。



「お金の地産地消」を実現する、市民による市民のための“銀行”



全国各地に
この仕組みを
広げたいです

コミュニティ・ユース・バンク
momo代表理事
木村真樹氏

きむら・まさき ●1977年生まれ。愛知県名古屋市立向陽高校、静岡大学人文学部言語文化学科卒。地方銀行勤務を経て、A SEED JAPAN 事務局 局長やap bank 事務局スタッフなどを歴任。05年にmomo設立。

NPOバンク

愛知県名古屋市

もともと銀行に
勤めていたんですね

好きな地元で働きたいと思い、「地域貢献」という理念を掲げる名古屋の地方銀行に01年に入行しました。中小企業などへの融資担当だったのですが、当時は国家的な不良債権処理の真っただなか。銀行としてあまりお金を貸せる時期ではなく、地域貢献の仕事ができていた実感は

ほとんどありませんでした。

地域とかかわるにはNPOやNGOもあると知り、1年半勤めた銀行を辞めてNGOスタッフになるための研修プログラムに参加。国内外でフィールドワークをするなか、先進国が途上国に「構造的な暴力」をふるっていると感じました。結局この社会はお金を握るほうが仕組みをつくり、メリットを享受していて、全然フェアじゃないなと。

東京ではどんな活動を
したのですか？

国内に置き換えると都市と田舎の関係も同じで、それならばくは生まれ育った街にかかわっていいかと改めて決心しました。しかし、いきなり名古屋でNPOを立ち上げる力 wasn't なかったので、一度東京でもまわってから名古屋に戻ることにしました。

NPOバンクである
momoの仕組みは？

「お金の地産地消」を実現する、市民による市民のための金融システムです。市民から集まったお金（出資金）を、地域課題を解決するNPOや個人などに貸し付ける（融資）。つまり、市民のお金で地域を豊かにする事業を応援する仕組みです。

11月10日現在、約470人の出資者から約4700万円の出資金が集まっています。

なぜmomoから借りたい
NPOが増えているのですか？

NPOなどは土地建物や資本金といった「担保」がないケースが多いので、銀行がなかなか融資してくれないという事情があります。しかしそのことより融資を希望する理由でもっとも多いのは、momoからお金を借りた途端、約470人の応援団やほかの事業者とつながれること。創業間もないNPOにとって、これは非常に大きいようです。momoでは融資先訪問ツアーやユーズレターの発行など融資先と出資者をつなぐ数多くの企画を進めていて、momoレンジャーという若いボランティアスタッフがその重要な役割を十二分に果たしてくれています。

出資者にはどんなメリットが
あるのですか？

個人は1口1万円から出資できますが、元本の保証はなく配当もありません。それでも出資する人がmomoに限らず各地のNPOバンクで増えている理由は、自分のお金が有効に使われている実感があるからだと思います。メガバンクの預金は原発の開発に使われるかもしれない。けれどもNPOバンクならば、行き先がはっきりわかるのです。地域の当事者を増やすツールとして、お金はすごく重要だと思います。

体が不自由な人の 「旅行に行きたい」を かなえる手助けをする

バリアフリー旅行

京都府京都市



株式会社旅のお手伝い 代表取締役
佐野恵一氏

さの・けいいち ● 1984年生まれ。奈良県立桜井高校卒。2006年、同志社大学経済学部3年生のとき、個人で「旅のお手伝い 楽楽」を創業。2008年に株式会社に。現在、正社員13人、登録スタッフ20人。

事業の内容を 教えてください

体が不自由な人とそのご家族が「行きたいところ」への旅行を楽しめるよう、お手伝いをします。当社が契約する介護福祉士や看護師などが同行し、ご自宅への送迎、現地のご案内のほか、入浴やお手洗いの介助、食事処や宿泊施設の手配など、ご

誰もが気軽に
旅行を楽しめる
社会にしたいです

希望やお体の状態に合わせてオーダーメイドで旅行プランを組みます。

旅行先はほとんどの地元の京都が多いのですが、お客さまのニーズに合わせて日本全国、また海外旅行のご希望にもおたえしています。目的もさまざまで、観光地めぐりからお芝居鑑賞、大相撲見物、お孫さんの結婚式出席などなど。そうした

ニーズに対し、安全で快適な旅行を提供するために綿密な事前調査が欠かせません。車いすで入れる公衆トイレの有無、観光施設の床の段差の状況など、現地を下見し、情報をつかむことが重要です。たやすい仕事ではありませんが、大きな喜びがあります。旅行をあきらめていたお客さまが「良かった！次も行きたい」と笑顔になる、ご家族も笑顔になる。そうした場に僕は立ち会えるのです。

もともと介護や旅行関係の仕事に興味があったのですか？

もとは教員志望でしたが、大学1年の冬、体が不自由な祖母との家族旅行がきっかけになりました。バリアフリー設備の温泉旅館でしたが、祖母の入浴介助を家族でやらなければならず、全員が疲れてしまいました。「誰かが少しでも手を貸してくれたら介助が必要な人もその家族も、もつと旅行を楽しめるのに」と思いました。その体験をもとに介助事業のアイデアをまとめ、学内のビジネスプランコンテストに応募したら最優秀賞に選ばれたのです。賞金の一部でホームヘルパー養成講座に通い、2級を取りました。起業したのは大学3年生のとき。右も左もわからないばかりでしたが、大学の内外には学生ベンチャーを応援してくれる方が大勢いらして、支えていただきました。

会社の経営者としての モットーは？

お客さまが利用しやすい旅行代金にするために、ホテルや旅館とコラボレーション

をするという努力をしています。企業として利益を出す必要があります。最大の戦略は、お客さまに全力でサービスをすることに尽きます。それが口コミとなり、新たなお客さまやリピーターにつながる。3年前に比べ、お客さまは2倍近くに増えました。また、京都府、奈良県などの自治体と業務委託契約を結び、地域の観光推進のために頑張っています。

これまでの活動で どんな成果がありましたか？

京都府は国際的な観光都市ですが、国宝や重要文化財の建物が多く、バリアフリーへの改造が難しいのです。でも、段差をなくしたり、車いす用のスロープを設けるといった観光施設が増えました。なによりうれしいのは、人の心のバリアフリーです。観光施設やお店の方が「お手伝いしますよ」と、一緒に車いすを持ち上げてくれたりすることも珍しくなくなりました。ほかが目指すのはそこなんです。誰もが気軽に外出できる社会、自然と手助けしあえる社会。その手段に、多くの場合は株式会社という事業形態を選んでいきます。旅行介助がビジネスとして活発になることで、社会全体が変わっていくと、信じています。

そうした一方で、介護保険制度など公的な制度の改正や仕組み作りの必要性も感じているので、同志社大学大学院総合科学研究科に在籍し、研究を続けています。まずは、他大学と連携し、旅行介助の人材を養成する講座を始める予定です。

障がい者・高齢者・子ども支援

大阪府大阪市

み・らいずの活動内容を
教えてください

障がいのある方や高齢者の方、子どもたちが地域でいきいき暮らしていくための支援をしています。み・らいずとは別に株式会社も設けていて、ガイドヘルパー（障がいのある人と一緒に外出するヘルパー）の派遣など障害者自立支援法や介護保険制度の制度内の支援は株式会社担当。み・らいずは、キャンプや地域イベントの開催、発達障がい児・不登校児の学習支援、障がいをもった方のアートを使ったTシャツや雑貨の販売など制度外の支援を中心に活動しています。

現在の活動を
始めたきっかけは？

大学1年生のとき、友人の紹介で障がいのある方の入浴介助のアルバイトをしたのがきっかけです。時給につられて始めたものの、最初は無理だと思いました。でも利用者さんやお母さんが温かく見守ってくださったおかげで、こんな私でもできるよになりました。

その後、その方が通う作業所のキャンプに参加して、自分もすごく楽しかったんですが、こんなに楽しいキャンプが年1回だけと聞いて、それならもともとと遊べるように私たちが主催しようという話になり、キャンプのボランティア仲間と一緒に、障

がいのある方と休日に遊びに行くサークルを始めました。

どうしてNPOを
立ち上げることに？

卒業前に仲間と「この活動を仕事にしていけないだろうか」と話し合っ、「やろう」と決めました。責任をもつて継続的に取り組むにはボランティアではなく「仕事」にする必要があると考えたんです。社会を知るためいったん就職し、1年後に退職して、み・らいずを設立。ガイドヘルパー事業と学習支援事業を始めたのですが、当初は苦しかったですね。

しかし、応援してくれる人も出てきて、徐々に軌道に乗り始め、03年に支援費制度がスタートすると、年間の売り上げがなんと1億円を超えたんです。それから、自分たちでも何でもこんなことになっているのかわからないまま、「サービスの提供」に忙殺されました。そして、2年経ち、苦情も増え売り上げも落ち気味というとき、利用者さんのお母さんが倒れ、その方が施設に入るかどうか、という問題が起きました。ちょっと待てと。この人たちが地域で暮らしていけるようにみ・らいずを作ったんじゃないのかと。そこで、みんなと相談して、いったん歩みを止めました。原点に帰って、お金や制度にとらわれず、利用者さんを支える仲間をもっと増

やそう、誰もが暮らし続けられる地域に変えようと軌道修正したんです。

事業のアイデアは
どうやって生まれるのですか？

改めて町の人や利用者の声を聞くと自分たちができることがたくさんありました。制度ではできない高齢者の外出支援や家の大掃除をやるうとか、障がいのある人たちのためのクリスマス会や餅つき大会を地域の人たちと一緒にやるうとか。

学習支援事業は当初家庭教師だけだったのですが今は塾。車椅子を利用して子に「私はみんなと同じように習い事に『通いたい』と言われて、よし、じゃあ明日から事務所の2階は塾にするぞと。

また、ほかの地域でやっていることで「いいな」と思ったことはすぐ真似します。難しく考えることはないんです。

賛同する仲間が
どんどん増えていくのも
うれしいです

障がいをもつ人たちや 高齢者などの地域での 暮らしをサポート

NPO法人み・らいず 代表理事
河内崇典氏

かわうち・たかのり●1976年生まれ。大阪府立阪南高校、近畿大学商経学部経営学科卒。大阪市立大学大学院創造都市研究科修士課程修了。大学時代からボランティア活動を始め、01年にNPO法人み・らいずを設立。

高校生に向けて
メッセージをお願いします

体験して初めてわかることは多いですが、それは進路選択にも影響します。高校生の間に地元の町でも海外でもいいからいろんな体験をしてほしいですね。



山間の人口1600人の村で 木材を使った商品を生み出し 100人以上の新規雇用を創出

森林再生

▽岡山県西栗倉村



村役場、森林組合など
村全体で協力し合って
活性化を進めています

株式会社西栗倉・森の学校 暮らし創造部部長
井上達哉氏

いのうえ・たつや●1984年生まれ。広島県立福山明王台高校、愛媛大学農学部森林資源学コース卒。インドネシアの熱帯雨林で半年間、卒業研究を行った。リサイクル会社勤務後、09年からこの会社に。

西栗倉・森の学校とは
何をやる会社ですか？

西栗倉村は人口約1600人の村で、土地の97%を森林が占め、うち87%を人工林が占めています。人工林を維持するには間伐（混み合った森林から木を間引くこと）が必要なのですが、間伐した材木が安値でしか売れなかったり、山主さんの高

齢化などのため放置されていました。森がさらに荒れてしまわぬよう、村が間伐を進め、森を蘇らせる事業が3年ほど前から始まりました。そのなかで株式会社西栗倉・森の学校という会社は、間伐材に付加価値をつけて販売したり、「西栗倉」というブランドを世の中に広めるために、廃校になった小学校の校舎を借りて事業

をスタートしました。

井上さんのお仕事を
教えてください

私は間伐したスギやヒノキを製品化し、販売することを主に担当しています。例えば東京や大阪のデザイン事務所と組んで、一般企業に無垢材を使ったオフィスづくりを提案しています。無垢材とは天然の木から切り出したままの材木のことです、香りがよく、パソコンに向かって仕事をしてもリラックスできます。少々傷ついたり反ったりしますが、使い込むほどに味が出ます。大手メーカーより割安なこともあって、販売は好調です。材木として売るのが10倍や100倍もの付加価値がつけられるので、事業に貢献している実感はありますね。製品が売れるようになるとそれにかかわる人が必要になって、雇用が生まれます。当社も2年前は4人の会社だったのが今は31人。そのほか、村には3年間で50人以上がインターン就職していますし、村内での新たな雇用も生み出しています。

やりがいの大きな
お仕事ですか？

すごく大きいですね。利益が出ることも、雇用が増えることもうれしいですが、小さなころから森が好きだった私にとって、森が保全されていく様子をこの目で見るのが一番うれしいですね。

つまり製品が売れば売れるほど材木が必要になるので、森の間伐が進んでいくんです。間伐をしないと光が地面まで届

かないから根が浅くなつて幹が弱くなるし、地面に草が生えず地滑りの原因にもなる。ところが、間伐が進めば森に光が入り、森が元気になります。保水機能や浄化機能が高まるし、動植物や昆虫が戻ってくるし、何より光合成という一番重要な役割が活性化します。

外から来たインターンという立場で
難しいことはありませんか？

最初は地域の方もこちらもお互いに戸惑いがあつたような気がしますが、一度打ち解けてしまえばまったく問題はありません。むしろ、とてもかわいがってくださいね。山主の方々から森のお話を聞くことがあります。戦後とても頑張つて植林をしたり、枝打ちをして森をこままで育て上げてきたという話を私たちは興味深く聞くのですが、息子さんやお孫さんはあまり聞こうとしてくれないと嘆く方が多いですね。お金にならないために林業から離れてしまうというよりも、受け継いでくれる人がいないことに失望している方が多いような気がします。

そういう山主のおじいちゃんたちにも事業に協力してもらおうようにしています。例えば当社に「学習机づくり体験ツアー」があります。父親が木を切り、学習机を作つて子どもにプレゼントする親子対象の企画ですが、木を切る前に森の話をしてもらうんです。「70年前に植えた木が、ここまで大きくなったんです」。おじいちゃんの言葉の重みが、お客さんに大きな時間の流れを伝えてくれます。

起業家支援

▽ 島根県松江市

しまね起業家スクールとは
何をすることですか？

「しまねでやりたいことを実現する」が合言葉で、ここには将来起業したい人や起業して少し迷っている人、親の会社を引き継いだ人などさまざまな人が集まっています。4カ月間14回の講義の中、ビジネスとは何かを改めて考えたり、ビジネスプランを練り、プレゼンテーションを磨き上げる。スクールが一体となつて各々の夢の実現を後押ししていきます。11年間で650人の卒業生、60人以上の起業家を輩出しました。地元では「歴史あるスクール」と見られるようになり、会社を辞めて受講したり、「やっとここに來れた」と喜んでくれる人もいます。

佐藤さんは卒業生だそうです
なぜ受講したのですか？

フリーターだった29歳のころ、知人の紹介で受講しました。それまでにはいろいろと紆余曲折がありまして、高校は進学校の雰囲気肌に合わず2年で中退しました。父のペンキ屋ですぐ働き出し、お金を貯めてカーレーサーの学校に行こうと計画したものの、お金は貯まらないしペンキ屋の修行もつらい。そのうち友人から健康食品の紹介販売を勧められてのめり込みました。しかし大きな借金をつくって親に勘当され、広島でホームレス同然の生活

に。それも挫折し、親に泣きついて島根に戻って昼はペンキ屋、夜はラーメン屋台で働いて4年間で借金を何とか完済しました。すると今度は家業のペンキ屋が経営不振になり、立て直すために奔走。それが何とか落ち着いて私はフリーターとなり、将来のためにはと思って何となく受講を決めたんです。

スクールに入って
何かが変わりましたか？

考え方すべてが変わりましたね。自分の数々の失敗や家業の借金などで当時は世間を逆恨みしていたんです。銀行や税務署はまるで助けてくれないし、借金や税金、保険という社会で絶対に必要な知識をなぜ学校では教えてくれないのかと。そんな私の心に講師の語った言葉はスツと染みこみました。「仕事とは人に喜ばれること」「今できることを全力でやろう」…そのとおりだと素直に感じました。スクールの集大成は選ばれた6人のプレゼンで、それにたまたま私が選ばれ、でも人生初のプレゼンだからすごく戸惑ったのですが、たくさんさんの人の応援で大成功を収めました。それがたいへん励みになったんです。ご恩返しと思って修了後も講義に出続け、演出の手伝いやアドバイスをしました。当初このスクールは県中心に運営していたのですが予算が減り、存続が危う

失敗したって
人生終わりじゃない。
あきらめずいきましょう

今後はどのような活動を
していく予定ですか？

法人名のガッショとは出雲弁で「一所懸命」という意味です。普段は毎週火曜の夜にミーティングをしています。私はペンキ屋、10人ほどのメンバーもみんな仕事をもちながらの活動です。NPO法人からの収入は、ほとんど誰もありません。たとえ受講生が減ったとしても、このスクールはやり続けなくちゃダメだと思っています。あんな元フリーターだってやれるんだとみんなに思ってもらいたいです。不況のせいで最近では家業が倒産した方も

みんなで支え、励まし合って
11年間に卒業生650人、
起業家60人輩出

NPO法人Gassho(ガッショ) 代表理事
佐藤大典氏

さとう・だいすけ●1973年生まれ。島根県立松江南高校中退。第2期しまね起業家スクール受講。しまねビジネスプラン大賞「奨励賞」、ETIC主催STYLE2003「優秀賞」。住宅・店舗塗装のポインテリア代表

来ますが、そういう方や、就職や大学受験で失敗したような方にもぜひ来てほしい。「そんなことで人生終わるわけじゃない、全然大丈夫！」と声を大にして言いたいですね。地域にはそんな場所も必要ではないでしょうか。



障がいと言い訳にせず 食品事業を成功させ 120人の障がい者を雇用

障がい者就労支援

高知県高知市

どうして福祉の道に進んだのですか？

小さなころから街で見かける障がい者が気になって、いずれこの人たちのお世話ができたらいいなと思っていました。中学生で「愛は地球を救う」という『24時間テレビ』を観て、やはりこの道だなと。大学で福祉を学び、高知市内の病院で医療ソーシャルワーカーになりました。

ところが退院した患者さんが、たびたび再入院するのを見て「問題は病院ではなく地域の福祉だ」と考えるようになり、病院を辞めて社会福祉協議会に転職しました。そこで障がい者にさまざまなサポートをしたんですが、私がかかわる方はあまりよくなりませんでした。むしろ福祉の世話になつていない人たちのほうが元気で、スポーツや芸術を自然に楽しむ姿がか

つよかった。

「お世話をするというスタンスがいけないのだ」と気づきました。私たちがやるべきは「チャリティ」ではなく「チャンス」を提供して自立を促すこと。そう確信してからは、就労支援や自立支援について伝道師のように講演したり、指導するようになりました。

そこからなぜ独立することに？

「障がい者の多くは月収1〜2万円なのに私たちは月収30万円。こんな社会はおかしい。障がい者にも平等にチャンスを与えましょう」と障がい者施設などで演説する自分がたまたまの「評論家」にすぎないと気づいたのが40歳のとき。安定していましたが、このままでは自分がダメになると思い、ボーナス支給日に退職。そしてパン屋を始めるんですが、これが大失敗。障がい者にせめて高知市の最低賃金(当時611円)は払うと宣言し、払い続けたんですが、肝心の商品が売れず私は無給、会社はどん底に。

結局、自分は商売がうまいと錯覚していたのと、障がいと言い訳にした「甘え」があったのでしょ。

どうやって浮上したのですか？

味も、品質も、届ける時間の約束も、すべてにおいて「障がい者がやりますんで、すみません」とは決して口に出さず、歯を食いしばって頑張っていたら、お客さんが認めてくれるようになっていました。

うちは今、カフェや甘味処、パン屋などを経営していますが、福祉色を切なくしているんです。「障がい者がやります」とはどこにも書いていないし、高いお皿も使っています。ふつう障がい者のお店は割れないお皿を使うことが多いんですが、あれはお客さんにとって魅力がない。「障がい者のためのお店」では結局儲からないんです。儲からないから障がい者の給与も低く抑えられてしまう。

さらにお店には福祉職を配置しないようにしました。障がい者を知るがゆえに可能性の芽を摘むことがあるんです。事情を知らない人が「はい、これお願い」なんて頼むと、意外にできたりすることがある。そういうのが重要なんです。でも本部などには福祉職の人たちもいます。

今後はどのような展開を考えていますか？

現在、従業員180人中、120人が障がい者です。120人中の40人がトレーニングの人で、うちからホテルやスーパーなどへ毎年一般就労を果たしています。残り80人が継続就労の人。

うちは120人雇っているからすごいなんてまったく思いません。私の目の黒いうちに、地域にまんべんなく障がい者が働いている状態にしたいのです。銀行の受付に車イスの人がいて、ガソリンスタンドでは精神障がい者が給油している。テレビでも車イスのキャスターが天気予報をしている。それが自然だと思ふんですが、どうして今そうなのではないんでしょう？

あらゆる職場に
当たり前障がい者がいる
世の中にしましょう

NPO法人 ワークスみらい高知 代表
竹村利道氏

たけむら・としみち●1964年生まれ。高知・私立高知高校、駒澤大学文学部社会福祉学科卒。病院勤務の後、高知市社会福祉協議会に転職。04年に退職し起業。現在は食品事業のほか美術館なども経営。

映画館運営をベースに 地域活性化の裏方として 市民活動をサポート

映画館運営・市民活動支援

宮崎県宮崎市



NPO法人 宮崎文化本舗 代表理事
石田達也氏

いしだ・たつや ● 1963年生まれ。宮崎県立宮崎商業高校卒業。アメリカへ留学し、帰国後、英会話教室を開講。喫茶店を開業するが、95年「宮崎映画祭」開催を機に閉店。地元映画館に3年勤め、2000年、NPO法人設立。

映画と地域が元気になるきっかけを
創ることが仕事です

NPO法人を設立した
経緯を教えてください

きっかけは95年に始めた「宮崎映画祭」です。もともと映画が好きで、実行委員会初代事務局長として企画・運営に携わりました。1年目は大盛況だったのですが、2年、3年と経つうちにチケットも売れなくなり、しだいに行き詰まっていきました。

た。このままでは継続は難しい、市民ボランティアでは限界があると感じて、有志で2000年にNPO法人宮崎文化本舗を立ち上げ、「キネマ館」を市内中心地に作りました。

現在の活動内容を
教えてください

映画館「キネマ館」の運営を中心とした

芸術・文化のまちづくりと、市民活動団体の事務局を代わりに行う事業を展開しています。07年度からは地域住民と連携しながら「みやざきアートセンター」「宮崎市自然村休養センター」など、公共施設の管理業務も請け負っています。さらに「綾川流域照葉樹林保護・復元プロジェクト」の事務局も担当しています。設立当初は3人だったスタッフも、現在は約35人。事業規模も3億円を超え、県内で最も大きなNPO法人に成長しています。

ほかの市民団体をどのように
支援しているのですか？

映画館事業だけでは収益の確保が難しかったのと、空いた時間も有効活用できるし、映画祭で培ったノウハウも生かせるので、NPOや市民団体の活動を補助する代行業務もやることにしました。最初の案件は、歯科医師グループが実施した障がい者のコンサート。会場やチケット手配、集客、宣伝、当日の司会進行のノウハウまで提供したところ、大成功。それがきっかけで、多くの市民団体から依頼されるようになりました。ただ何でも引き受けるのではなく、あくまで地域活性化につながる活動に限定しています。

この仕事のおもしろさを
教えてください

「一度はハリウッドを見ておかなくては」なんて思っ、高校卒業後アメリカへ留学したほど、小さい頃から映画が大好きでした。でも、最近になって映画そのものの以上に、映画を観たあと、食事したりしながら、感想をいろいろみんなです話するのが好きなんだと気づきました。共有の体験を楽しんで「また観たいね」なんて言い合えるのがすごく心地いいんです。

そんな映画に対する感覚と、地域づくり、まちづくりに対して感じているものがとても似ているんです。地域の活動に協力して、団体の人たちにすこし喜んでもらって、「ああだったね、こうだったね」と楽しく話ができて、「また、一緒に何かしましょうね」と互いに思える。そういう関係性をさまざまな方々と築いていけるのがこの仕事の醍醐味です。映画館でも観終わったあと、感動したお客さんが「ありがとう」と言ってくれ喜んでもくれる。そうすると、こちらもうれしいじゃないですか。お金を払う側もいただく側も「ありがとう」と言える仕事をこれからはかけたいと思います。

今後はどのような
活動を予定していますか？

私にとって「キネマ館」はホームグラウンド。映画のニーズが今後どれだけあるのか正直わからないのですが、とにかくここから宮崎の活性化につながる文化・芸術の発信を継続して行っていきたい。同時にさまざまな市民団体の裏方としてできることをしていきたいです。

若いスタッフにはやりたいことを自由にやつてもらっています。実際、彼らのアイデアで昨年は「仮面ライダーアート展」を開催、今は「宮崎のエッセイ・リズム」を結婚式などの引き出しギフトにするという企画を進めているところです。